

松本市森林再生市民会議 令和5年度第1回運営委員会 議事録要約書

日時 令和5年4月26日（水）

午後7時～9時

場所 松本市役所3階 大会議室

～ 議事概要 ～

■会議事項

1 フォーラムの報告

- 以下の内容で実施
 - ・日時：令和5年3月18日（土）13:00～16:00
 - ・場所：あがたの森文化会館 講堂ホール
 - ・参加者：17名
 - ・内容：トークセッション、グループワーク（森の「物」と「場」としての利用）

※詳細は資料1参照

2 R4年度のまとめ

- イベントやフォーラム、運営委員会での意見をまとめる際に、林業分野や他の自治体で作成された既存計画にある区分にとらわれることなく、松本市の森林の実情や市民の声を正確に反映した区分を委員が設定していくことが重要。
- 区分を正確に設定することも重要である一方で、市民からの意見の傾向を正確に読み取り、その意見に応えられる取り組みについて考えていくことも重要。

3 R5年度の取り組み

(1) 森林長期ビジョンについて

- 人間の生活スタイルの変化によりこの50～60年で森林と人間の間乖離が生じてしまった。昔は森林所有者と利用者が一緒であることが多かったので何の問題も生じなかったが、今は森林所有者と利用者が別であることが多いため、色々な問題が生じている。どうしたら解決できるのか皆で考えたことをビジョンに描けるとよい。またビジョンでは、策定後何年か経った後に、実情に合わせて見直すといったメッセージも発信できるとよい。
- 何を指すのかという森林の将来像についてフォーラムやイベント、アンケート等から市民の希望を拾い上げなければならない。また、現状で市民が望んでいなくても、将来的に有用と思われるものも取り入れていかなければならない。
- 多くの市民から不安に思う意見が寄せられた「松枯れ」の問題について、松枯れから森林が再生していく姿を実際に示せれば、市民に安心や理解を広げていくことができるのではないかと。岡田地区の松枯れ箇所では、実際に広葉樹林化する予兆も見られている。
- 森林は生き物の集合体であり、人間とは関係なく森林として続く。それを知ったうえで森林に対して人間は何ができるのか、人間が森林に対して働きかけると森林はどう変わるのかを市民に広めていけるとよい。森林への働きかけには様々なパターンがあり、その中から

市民の希望に沿った森林の将来像を選択していくというイメージではないだろうか。

- フォーラムのような形で意志のある市民から意見を聞くことも必要だが、一番声を聞きたい人口の多い市街地で生活している市民から意見を引き出そうとすると、フォーラムの形式では難しい。市街地で生活する市民からもうまく意見を引き出すよう工夫していかなければならない。意見や感想を自発的に発信したい時に発信したり、「松本の森はこうあったらいいな」と思った瞬間にその思いを拾い上げられるような仕組みがあるとよい。
→ボランティア活動場所の森林にホワイトボードを置いて来訪者から意見を書いてもらったり、利用者の視点からの自発的な動画配信※実際の実施事例
→地元の中高生が主体となった取り組み 例) 安曇野市の地元誌「AZUMO」、浅間温泉地区の高校生や留学生による取材活動
- ビジョン策定に市民が関わっていくには、全く知識がないというのが正直なところではないか。知識がなければ想像もできないので、その知識の部分を分かりやすく示せると具体的な想像に繋がりがやすいのではないか。
- テキストとしてまとめられるビジョンの他に、そこから派生する色々なメディアによる発信をどうやってうまく回していくのか、その部分をビジョンの中で触れることで、それを起点にどんどん取り組みがビジョンからはみ出していくような状況になると面白いのではないか。
- 松本市の森林を自分ごととして考え、将来像を思い描いてくれる市民が形成されるということも目標かもしれない。そのための仕組みを考えることも、テキストの形でビジョンを作ることと合わせて取り組まなければならないのではないだろうか。

(2) イベント及びフォーラムについて

- 委員がイベントを企画する一方で、市民からの持ち込み企画を受け付け、その実現をバックアップしていくという取り組みはどうか。
- 渡辺委員から提案のあったグラフィックレコーディングも実現したい。
- 大町市、安曇野市、伊那市、高山市などの先進事例を求めに行くのはどうか。

■その他

- 次回の委員会は5月中旬頃とし、今年度の具体的な取り組み内容を中心に議論する。
- 菊地委員が5月1日付で松本市議会議員となるため、4月末日をもって松本市森林再生市民会議運営委員を辞することとなった。欠員1名の補充については、今後事務局（松本市）で検討する。

議事録要約

1 委員長あいさつ

(三木委員長)

令和5年度の第1回運営委員会となる。この2年度目は最終的なゴールに向けて具体的な取り組みを検討する時期に来ている。今年度1年間よろしくお願ひしたい。また、年度が切り替わったため、委員の中にも異動等で部署や所属先が変わられた方もいらっしゃると思う。早速お一方いらっしゃるのご挨拶願ひたい。

(菊地委員)

ご存知の方もいらっしゃると思うが、今回の松本市議会選挙で立候補し、お陰様で当選という結果を頂くことができ、この5月1日付で市議という立場となるので、委員を辞退させていただく。

森林再生と食の地産地消を訴え、環境エネルギー政策を前面に出して当選させていただいたということもあり、それが絵空事にならないよう今後は議員の立場から森林再生に取り組んでいきたいと考えている。この森林再生市民会議並びに運営委員会とは今後も密にコミュニケーションを取り、伴走する形で走り続けたいと思っているので、ビジョン策定についても引き続き情報共有・連携等よろしくお願ひしたい。

(三木委員長)

市民によるこういった会議と議会制民主主義の関係はどういった形が望ましいのかは、松本市の中でも色々と意見があることと思うが、緊張感のある議論のやり取りができると望ましい。

2 会議事項

(1) フォーラムの報告

(三木委員長)

フォーラムについて、事務局から説明をお願ひしたい。

(市)

フォーラムの報告については、事前に配布した資料のとおりである。ご質問等あるか。

※資料1

(委員一同)

特になし。

(三木委員長)

フォーラム当日は把握できなかった内容として、フォーラム後のアンケートで参加者から寄せられた意見が資料に掲載されているので、確認しておいてほしい。

(2) R4年度のまとめ

(三木委員長)

次に、R4年度のまとめとして資料を簡潔に説明願いたい。

(環境アセスメントセンター)

R4年度のまとめを説明させていただく。

※資料2説明

(三木委員長)

昨年度我々が議論に要した時間は、まとめてみると10時間ほどにもなるかと思う。それらをすべて思い起こすのは難しいので、こういった形で文章や図表として整理していただくと、足りない部分も含め見えてきて分かりやすい。委員から質問や意見はあるか。

(清水副委員長)

何かもやもやしてスッキリしない部分がある。

(小山委員)

それは、現状ではまだゴールが決まっていないからではないか。この資料は途中段階として整理したもので、完成形ではない。

(菊地委員)

資料3枚目の表「森林の現状と課題及び既往計画における対応方針等の記載状況(案)」について、右側の列の「既往計画における対応方針等の記載内容」というのは資料5枚目の表「関連計画における森林の機能等の記載状況(整理案)」から抽出したものという理解でよいか。

(環境アセスメントセンター)

そのとおりである。

(菊地委員)

資料3枚目の表の右側列「既往計画における対応方針等の記載内容」では、今後整理するに際して、該当する関連計画を示していただけると参照先が分かるのでありがたい。

(環境アセスメントセンター)

承知した。

(清水副委員長)

まず、表には説明しやすいよう番号を付けていただきたい。資料3枚目の表「森林の現状と課題及び既往計画における対応方針等の記載状況(案)」について、令和4年度にイベントやフォーラムを行って、市民の意見から抽出された課題がここには盛り込まれていない。市民の生の声を課題とすることが肝要である。また、表にある5つの区分は、他の多くの自治体や森林行政です

でに取り上げられてきた区分であり、この区分に該当しない新たな課題は抽出されないことにもなる。

(小山委員)

そもそもこの区分でよいのか。資料で示された区分は一般的に林業分野でよく取り上げられる区分で、松本市の森林ビジョンで適切かどうかは別問題である。このビジョンのポイントとして、“森林”とはどこまでを指すのかを認識しておくことが重要である。具体例を出せば、一般的に森林として扱われないあがたの森やアルプス公園、駅前の街路樹等は、この松本市のビジョンではおそらく森林に該当してくることになるので、この区分が適正なのか疑問がある。

資料1枚目の表はこれまでの既存計画の整理内容であるためこの区分でもよいが、2~3枚目の表は松本市森林ビジョンに関わる内容であるため、再考が必要である。

(清水副委員長)

最後は市民が見ることになるので、紛らわしい表記や過去事例の焼き直しのような整理はできるだけやめた方がよい。

(環境アセスメントセンター)

資料に関し少し誤解があると思うので、補足させていただく。こういった議論になった時点でこの資料を作成した意味はあると思っているが、この資料はあくまで林業分野での既存区分を元に整理した内容で、この区分がそのままビジョンに反映される訳ではないということをまずご理解いただきたい。市民の意見を元にしたテーマや区分の構築、計画の作成は、まさにこの運営委員会の場で生み出されていくものであるという認識である。委員の皆様から区分を含め方針や方向性を示していただき、我々はそれを資料として形にしていくという流れになるとありがたい。

(菊地委員)

「この区分ではないのではないか」という意見が出された時点で、すでにこの資料の価値はあると思っている。そこで、我々委員はこれを受けて今後どういった議論を進めていくのかということが重要である。

(清水副委員長)

納品する資料ではないという認識でよいか。

(菊地委員)

先ほどの説明では、そう明言されている。

(清水副委員長)

資料の位置付けについて委員が理解できることが大切なので、何となく既存の区分に当てはめてみたということだけでなく、何のために作ったのか、もっと明確に説明するべきではないか。それぞれの資料に関する説明がもう少し必要なのではないか。

(環境アセスメントセンター)

最初の表は、あくまで長野県や松本市における森林や林業に関する既存計画の概要でしかない。参考として見ていただくだけの資料である。松本市森林ビジョンの中でも既存計画と似た内容を記載していく可能性があるため、ここに参考情報として整理している。2番目の表は、これまでのイベントやフォーラム、運営委員会で得られた意見をある程度キーワード化して整理した。3番目の表は、最初の表の参照元ということになる。ちなみに2番目の表については、ある程度意見の傾向が読み取ればという意図で作成しており、令和5年度の取り組みに関するテーマ立てなどに役立てていただけるとありがたい。

(三木委員長)

コンサルタントに作成していただく資料はこちらが指示すべきもので、これらの表をどう使うのかは委員側に課せられた問題という認識である。例えば、2番目の表の「生物多様性」の区分では、イベントやフォーラムで得られた意見の中では圧倒的に「松枯れ」に関するものが多い。研究者の視点では、生物多様性は国立公園のような高山域の希少種の自然保護を連想することが多いと思うが、市民の視点では、市街地に隣接する環境への関心が高いということがここから分かる。この表だけでも、我々が松本市の森林の将来像をどういった形で描くべきなのか、課題が見えてくる。

(清水副委員長)

松枯れ問題は山地保全の分野に該当すると思うが、生物多様性の区分に当てはめるのは妥当なのか。

(小山委員)

松枯れは複合的な問題であるため、山地保全にも生物多様性にも該当するのではないか。区分を正確に設定するのが我々の仕事ではなく、市民から得られた意見から仮説を導き出して検証していくことが大切である。市民からの意見の傾向を正確に読み取り、その意見に応えられる取り組みを考えていくことが重要であると思う。

(3) R5年度の取り組み

ア 森林長期ビジョンについて

(三木委員長)

年度初めの委員会でもあり、今年度以降ゴールを見据えて我々は何に組み込まなければならないのか議論したいので、ここからは令和5年度の取り組みについて話し合っていきたい。特に今回は残りの時間「森林長期ビジョン」について話し合っていければと思う。

※資料3 (三木委員長作成) 説明

(香山委員)

ビジョンなので研究報告とは違って、こうなってほしい未来について市民の声を反映すること

が必要である。この会議は3年間であるが、希望する森林像は3年間で完成するはずはなく、市民が森林について関心を持っていく文化というか、市民参加での公共のあり方をこのビジョン策定を契機として発信できるとよい。

森林は我々の生活における基本的な背景で、森林について理解し取り組んでいくことは生活する上でとても重要である。昔は当たり前のように森林が生活の中に存在していたが、この50~60年で森林が生活の場から離れてしまった。森林は我々の身近にあるべき存在であるが、人間のサイクルに比べて森林のサイクルは長いので、人間の生活スタイルの変化により乖離が生じてしまっている。それから、避けて通れない問題として「森林はだれのものか」という問題がある。

制度上では森林法として土地所有が定められており、森林はただそこにあるのではなく、誰か所有者の土地の上に成立している。昔は(森林)所有者と利用者が一緒であることが多かったため何の問題も生じなかったが(国有林は別)、現在は所有者と利用者が別であることも多いため、問題が発生している。例えば、所有者だけでは松枯れなど森林の問題を抱えきることはできないし、利用者である市民からは“松枯れを何とかしたい”と思っても、所有者が分からない森林に勝手に立ち入ることができない。こういった問題点をどうしたら解決できるのか、皆で考えたことをビジョンに描きたい。また、3年間でビジョンを作る訳であるが、何年か経って実情に合わせて見直すことも可能であるといったメッセージも発信できるとよい。

(小山委員)

資料にある「このような森林になれば松本市は面白い…」の「このような森林」がポイントで、松本市の森林の将来像に関わる「このような」の部分具体的に議論できないかと思う。ここが決まれば、あとは“だからどうする”の繰り返しで、芋づる式に進んでいくことが予想される。

(三木委員長)

将来像を考える時に、現状の問題から積み上げていくやり方と、まずゴールを決めてから現状としてやるべきことを落とし込んでいくやり方がある。具体的な手段については専門家に任せればよく、何を目指すのかという将来像の部分について、フォーラムやイベント、アンケートから市民からの希望を拾い上げていかなければならない。また、現状では市民が望んでいなくても、将来的に有用と思われるものも取り入れていかなければならない。

(菊地委員)

「このような」が「どのような」なのかを話し合う場が市民会議で、その市民会議をどう設計して運営するのかがこの運営委員会の場である。あと2年間でこういった場を設計し展開していけば松本市民の声を拾い上げられるのか、このあとの残り1時間で議論できるとよい。

(永原委員)

多くの市民から不安に思う意見が寄せられた「松枯れ」の問題について、市民が安心できるようにするためには、松枯れから森林が再生していく姿を実際に示していく必要があるのではないか。我々林業に従事する者は、「松枯れ」をあまり生物多様性の問題として捉えておらず、治山や木材生産の問題として捉えている。はげ山になってもその後実生から植物が復活してくる状況を

実際に見ており、あまり生物多様性の観点からは危機的だとは思っていない。

(三木委員長)

最終的にビジョンを作る際に、コラム等で松枯れから森林が復活する実例を示せるとよいかもしれない。松枯れではないが、浅間温泉地区の山火事では一旦森林が破壊されたものの、その後森林が立派に復活してきている姿を確認でき、市民が入っていける山づくりが実際に可能であるという実例が身近にある。松枯れした森林についても、15～20年経てば森林として回復していく姿を写真などで記録してその経過を示せば、市民に理解や安心を広げていくことができるのではないか。

(清水副委員長)

岡田地区で発生した松枯れ箇所を実際に確認すると、すでに遷移初期に侵入する広葉樹が定着できるような土の状態になっている。アカマツ林が松枯れで衰退した後に再びアカマツ林になるのではなく、広葉樹林化する予兆が見られている。

(香山委員)

森林は生き物なので、人間とは関係なく森林自身に行きたい方向がある。生き物の集合であり森林として続いていこうとする。それを知った上で森林に対して人間は何ができるのか。人間が森林に対して働きかけると森林は必ず変わってくる。それが森林の興味深いところで、松本市民が意志を持って森林に関わっていくことで、森林は変わっていくことを知らせていきたい。

(清水副委員長)

1970年代は、トウヒなど針葉樹の林床植物が全くない森林が歩きやすく良いとされていた。人間が森林をどのように利用したいかという意志が空間を決めることになる。これは歴史的に何度も繰り返されてきた事実である。

資料にあるイベントやフォーラムの意見について、寄せていただいた方々の属性はわかっているのか。

(環境アセスメントセンター)

属性までは分からない。

(清水副委員長)

アンケートを作る時に大切なのは、資料にある「生活の中で木材を利用したい」といったような意見がどういった属性の市民から寄せられているのかを把握することである。例えば、旧市街地周辺に居住されているような森林から遠い場所にいる市民を如何に森林に近づけるかが命題だと思う。「生活の中で木材を利用したい」という意見からは、生活の中で木材を利用することで生活が豊かになることを期待しているからだということが想像される。市民一人ひとりの声を拾い上げ積み上げて、しっかりとした根拠を持たせるということをこのビジョンの特徴にしなければならない。

(三木委員長)

森林から遠い場所で生活されている市民は人口の多くを占め、そういった市民から具体的な森林の将来像を引き出すのは難しいのも課題として感じている。ひょっとしたら木工とかクラフトとか、自分達の手を使うようなワークショップをイベントで行い、そこに参加してもらった市民から色々な意見を聞くといった意見の引き出し方もあると思う。

フォーラムのような形で意志のある市民を集めて意見を聞くのももちろん必要であるが、一番声を聞きたい一番人口の多い市街地で生活している市民から意見を引き出そうとすると、フォーラムという形態では参加してもらいのすら難しく、意見を引き出すことは尚更難しい。市街地で生活している市民からうまく意見を引き出すよう工夫していかなければ、良いビジョンはできないと思う。そういった視点でも何かアイデアがあれば頂きたい。

(小穴委員)

広く市民からメッセージを引き出す手段として、私の体験をご紹介したい。私が活動しているNPOでは、活動場所である森林を訪れる方々から意見や感想が頂けるか、試しに入口にホワイトボードを設置してみた。すると、「小穴さんありがとう」とか「韓国から来ました」とか、いわゆる普遍層の方々から色々な意見を頂くことができた。また、トレーニング中のある女子ボクサーと活動場所の森林で行き合うことがあり、「YouTubeで配信してもいいか」とお願いされたので許可したところ、優しさや女性らしさ、アスリートらしさを兼ね備えた素晴らしい映像を配信してもらえた。聞き出し方や広め方はこういったふうにイベントやフォーラム以外にも様々考えられると思う。

(三木委員長)

我々が市民から意見を聞き出す機会も必要であるが、意見や感想を自発的に発信したい時に発信したり、「松本の森はこうあったらいいな」と思った瞬間にその思いを拾い上げられるような仕組みができたりすると、フレッシュな意見が聞き出せるのではないだろうか。

(渡辺委員)

安曇野市では、地元の中高生とライターが協働して「AZUMO」というローカルマガジンを発信し、地元の中高生が主体となって地元市民取材している。地元の中高生が取材することで、それを見る他の中高生にも興味や親近感が生じ、自分ごととして捉えることで新たな発見も見出しやすくなると思う。また、取材される市民側からも、地元中高生が取材することにより、行政関係者が取材するよりも意見が出しやすかったり、世代横断的な意見交換ができる場が生まれやすいと思う。こういった地元の方々を巻き込むようなスタイルも提案したい。

他にも、柔らかい雰囲気イラストや文章で松本市やその周辺にある様々な森林の様子やその森林に関わる市民の声を紹介している取り組みもあり、こういった取り組みも合わせれば市民により森林のことを伝えやすいのではないかと。

(小穴委員)

浅間温泉地区では、地域の方々に昔の森林の様子をインタビューする取り組みを地元の高校生が3年間続けている。課題解決型の教育に取り組む場合にも参考になるのではないだろうか。また、我々のNPOでは損保会社から助成金を頂き活動を継続しており、民間企業を巻き込んでいくという取り組みも考えられる。それから、信州大学の留学生が浅間地区の山火事のことについて取材するゼミの企画も持ちかけられており、外国人からの視点では森林がどのように捉えられているのかというのにも興味深い。

(三木委員長)

ビジョンを作る際に中高生にも関わってもらいたいというのは、当初から私も提案しているところである。教育委員会との連携も鍵になってくると思う。

(清水副委員長)

この「AZUMO」という雑誌は、どういうきっかけで作ることになったのか。

(菊地委員)

この雑誌に携わっているメンバーの一人が私の経営している店舗のスタッフであるため、私から説明させていただく。元々は「コロマガプロジェクト」という全国展開しているプラットフォームがあり、その安曇野版を作ろうということで有志により立ち上がった。そこに行政も協力し予算が付く形で取り組みが現在も継続されている。安曇野市での取り組みでもあり、フリーランスのクリエイターチームによる取り組みでもある。地元中学生とプロのクリエイターが協力して地域メディアを作るプラットフォームをコロマガプロジェクトが提供しているという形になる。

(清水副委員長)

市内には森林に関わる多くの団体があるものの、多くの市民があまり森林に入っていないという実感がある。何か市民が自主的に森林に入りたくなるような情報を発信すれば、状況は変わっていくのではないだろうか。こういった形で委員から様々な情報が集積してくると、ビジョンも生まれてくる。それから、アンケートによっても市民から様々な意見が出てくる。それをまず確認して考えることが大事かもしれない。

大町市の材木市には自主性を感じる。自主的・自然発生的に面白いことをやりたい。「AZUMO」のような雑誌も出していくと森林に関わっていきたい人も増えるのではないか。その声を拾って集積していくとビジョンに繋がると思う。大きな話と具体的な話とビジョン策定には両方が必要と考える。林業技術は大切にそのイベントを立ち上げたい。

(大田委員)

ビジョン策定に市民が関わっていくには、全然知識がないというのが正直なところではないだろうか。知識がなければ想像もできないし、私自身も人が手を加えると森林がどう変わるのか知りたいけど分からない。それを自分一人で学ぶのは難しく、その部分を示してもらえると具体的な想像に繋がりがやすい。

(小山委員)

今までの話を聞いていて、2軸あるのではないかと思う。森林自体がどう動きたいのかというサイエンスとしての縦軸があって、それに対して、我々人間が森林に手を加えると何が起きるのかという横軸がある。サイエンスとしての縦軸を分かりやすく説明しながら、我々人間が手を加えると森林はこうなるという視点で整理していくことにより、最初にあった“このような森林”につながっていくのではないか。「こうしたらこうなる」というパターンは、例えて言うと“あみだくじ”のように色々あって、その色々あるパターンから市民の希望に沿った“このような森林”としての将来像を選択していくというイメージではないだろうか。

(香山委員)

限られた時間の中でビジョンを形にしていく訳であるが、その形を今の段階ではあまり固定的に考えなくても良いのではないか。イベント自体もビジョンの一部を構成していて、そこから派生するメディアが出てきたり、イベントで作成した動画などもビジョンとしてまとめる際に集約されていくことになったりすると思う。テキストで印刷物としてまとめられるビジョンの他にも、そこから派生する色々なメディアによる発信をどうやって回していくのか、その部分もテキストのビジョンの中には触れられていて、それを起点にどんどん取り組みがはみ出していくような状況になると面白いのではないか。印刷物になったビジョンが主ではなく、取り組みの方をどうやってうまく回していくのが鍵になると思う。

(小山委員)

森林の将来像は「仕組み」がスタートするところという考え方もあるのではないか。ビジョンは「こんな森にしていくために私達はどう走り続けていくのか」という出発点としての起爆剤になるのかもしれない。方向性だけ決めるという次元でも良いのかもしれない。

(三木委員長)

この会議には松本市森林再生市民会議の運営という役割があり、それと同時に、市民会議に参加してくれる市民あるいはイベントやフォーラムを作ってくれる市民を増やしていかなければならないという役割がある。この2年間で成果物としてのテキストによるビジョンを納入するのは当然のこととして、熱心に活動してくださる市民を市民会議に登録する仕組みがないと取り組みを続けていくことは難しい。計3年間にわたって取り組むことで、松本市の森林について自分ごととして考え将来像を想い描いてくれる市民が形成されるということも最終目標かもしれない。そのための仕組みを考えることも、テキストの形でビジョンを作ることと合わせて取り組まなければならないのではないだろうか。

(小山委員)

今回の委員会では色々なキーワードが出てきた。委員から出てきた事例紹介や提案をうまく取り入れて、参加してくれる市民をこの委員10人から30人、50人と仲間を増やしていくにはどういった仕掛けをしていくのが今後のポイントになる。

(菊地委員)

策定されたビジョンが絵に描いた餅にならないようにするための仕込みをビジョン作りとともに準備することが必要と思っている。この委員 10 人の輪を更に一回り外側の輪に広げていくために、イベントやフォーラムで地域の課題を聞き取りつつ、合わせてビジョンを描いた後にビジョンの実現達成に向けて一緒に活動していく仲間を作っていく取り組みも意識されなければならない。ビジョンを描いた後に取り組んでいきたい活動のケーススタディをビジョン策定のプロセスにも組み込んでいく。例えば学校現場であれば、地元の中高生とともに取り組む具体的なイベントをビジョンの中にも記載し、そのイベントが松本市の様々な教育現場で実践されていくといった流れになるとよい。テキストとしてビジョンを描くことももちろん大切だが、そのビジョンをどう共有したり伝えていくかという視点も一方でとても大切である。

(三木委員長)

森林再生市民会議が森林に関するプロ集団の集まりになると面白なくて、森林に関して何か知りたい市民も参加してほしいし、そこにはもちろん経験豊かな方々も含まれているといった集団形成を期待したい。学校現場や地域でのクラブ活動の中にこの市民会議が取り込まれていき、子供達も学習できるという流れができる学校現場や地域からも歓迎されるのではないかな。単にビジョンを策定したり森林の問題を解決したりするだけでなく、市民会議を行政も関わりながら市民自身が運営することで、市民の生活自体が前向きに楽しくなっていくとよいのではないかな。それをできる用意するためのこの 2 年間でもあるのかと思う。

イ イベント及びフォーラムについて

(三木委員長)

まずはこの 1 年間の具体的な取り組みも整理しておかなければならないと思う。アンケートはアンケート作業チームの方で内容を詰めて、この場でも示し実施しなければならない。イベントは年間何回か実施しなければならないという計画を立てており、フォーラムは 1 回実施する予定である。その他、今日の話も含めてまずこういうところから取り組んではどうかという点があればご意見頂きたい。

(清水副委員長)

安曇野市とか、市民の登録システムを他の市町村で実施していないか調べてみてほしい。

(環境アセスメントセンター)

承知した。

(菊地委員)

我々委員がイベントを企画する一方で、市民からの持ち込み企画を受け付け、その実現をバックアップしていくという取り組みはどうか。具体的には、企画を提案してほしいという市民への投げかけと、提案してもらった際のバックアップ体制をどう構築していくのかを検討する必要がある。輪を外に広げビジョン策定後に一緒に取り組んでいく仲間を作ることに繋がっていくと思

う。

(渡辺委員)

期日も迫っているので難しいかもしれないが、クラフトフェアとの絡みを模索するのはどうか。例えば、クラフトフェアの画で持ち込み企画の募集を行ってみたり、メッセージボードの設置してみたりといった程度であれば、この1ヶ月でもできなくはないのではないか。

(三木委員長)

クラフトフェアはすでに参加が締め切られていると思うので、もしやれるとすれば、同じ日に近隣の会場でイベントを開催することはかろうじてできるかもしれない。来年度には是非そういった試みも実施できればと思う。

(清水副委員長)

渡辺委員から提案のあったグラフィックレーディングも実現したい。今年は予算を取るのが難しいと思うので、もし上手な方がいれば、3年目のプレゼンテーションで実施するのも良いかもしれない。

(菊地委員)

松本市の外に事例を求めに行くという取り組みも合わせて取り組んでみてはどうか。大町市、安曇野市、伊那市など県内だけでも森林再生に関する取り組みが市民レベルで先行して進んでいる地域はあるし、県外では高山市なども挙げられる。そこには運営方法やメッセージの発信方法など参考になる事例がきっとあるので、松本市の外側の知識・知恵を学ぶ姿勢がこの市民会議の中にも出てくるとよいのではないかと。

3 その他

(清水副委員長)

アンケートの実施方法のたたき台は、今日か明日まとめて委員に提示する。分からない点があればご意見頂きたい。

(市)

次回の運営委員会をいつ頃開催するか、大まかでも良いのでこの場である程度決めていただけるとありがたい。

(小山委員)

今回の運営委員会では、具体的にこの1年間何に取り組むのかまでは議論できていないので、ここで時間を空けてしまうのは良くないのではないかと。

(三木委員長)

5月中旬、できたら連休明けぐらいに設定できればと思う。

(市)

事務局の方で日程調整させていただく。以上をもって令和5年度第1回運営委員会を閉会とする。